

“I am a boy.” - An in-depth interpretation

(Be 動詞の一考察)

2010.2.10

西田 巖

(Richmond E.S.)

(はじめに)

いまから 50 数年前、初めて習った英語が、

This is a pen.

I am a boy.

You are a girl.

であった。(教科書はたしか“Jack and Betty” といった。)

10 数年前にサラリーマンを卒業した後、趣味として基礎から英語の勉強を始めたが、いまだに気にかかっているのが be 動詞と have 動詞の特異性である。

特に、be 動詞の変化は、am (一人称単数現在), are (一人称複数現在、二人称単数現在、二人称、三人称複数の現在), is (三人称単数現在), was (一人称、三人称単数の過去), were (一人称複数、二人称複数、三人称複数の過去) となり、人称・数 (単数/複数)・時制 (現在/過去) の組合せに引きずられて他の一般動詞に比べてあまりにも複雑に変形する特異な動詞といわざるを得ない。

さらに、進行形や受動態は、「be + ~ing (動詞現在分詞)」、「be + ~ed (動詞過去分詞)」のように be を用いるが、なぜ、わざわざ be 動詞 (文法的には助動詞) を用いるのかそのわけがいまだに分からない。

ということで、英語の be は、それが特異であるがゆえに、何か深い本質的、言いかえれば、英語の魂となるような意味合いがあるのでは思い、自分なりに be 動詞の考察を試してみた。

1. be 動詞の中心的意味は「存在する」(to exist)である

中学英語の入り口で、“I am happy.”, “He is a doctor.” は「僕は幸せだ (です)」、「彼は医者だ (です)」と訳し、be 動詞の意味は「～だ (です)」と習った。

その後、学習が進むにつれて、英語の文は、「S+V」、「S+V+C」、「S+V+O」、「S+V+O+C」、「S+V+O'+O」の五文型で表され、英語には必ず主語 (S) と動詞 (V) が必須だとくどいほどたたき込まれた。

すると、“I am happy.”, “He is a doctor.” の文中の am/is は動詞であり、それを「～だ (です)」と訳すと、日本語の「～だ (です)」は「動詞」ということになるが、これについては今一つしっくりしない。

手許の学習英和辞書で、be を引いてみると、その第一語義として、「<主語>は～<補語>である」

と説明している。そのあとの文法説明として、この **be** 動詞は「連結動詞」でありその機能は、主語を補語に結びつけるもの、すなわち、＜主語＞＝＜補語＞と説明している。

I am a boy. → I = a boy

You are a girl. → you = a girl

たしかに、普段の日常の口語訳では、**be** は「～だ (です)」の訳で良しとするが、それだけで **be** の意味とするにはいささか表面的で図式すぎると感じる。そこで、さらに辞書の下のほうに目を通すと、「～で存在する(to exist)」とするという訳が出てくる。

話し言葉として口調の不自然さを気にしなければ、**be** は、辞書の後段で記されているように「存在する」と解釈するほうが本当の文意と思われる場合が多い。中学で英語を習う入口で、**be** を単純に「です」と教えるよりも、あえて (深い意味で) 「～で存在する」、「～の状態で存在する」と教え込むほうが、より英語の深い理解につながるのではないか。

I am a boy.

→ (厳密訳) 「私は、(数ある中の不特定の) 一人の少年として存在する」

You are pretty.

→ (厳密訳) 「君は、カワイイ状態で存在する」

参考までに、OED(Oxford English Dictionary)は語義の解釈を厳密に歴史順に記しているが、このOEDで **be** 引くと、

To have place in the objective universe or realm of fact, to exist; also, to exist in life, to live.

と定義している。「to have place」(場所を占めること)、「to exist」(存在すること)、が使われていることに、**be** の本義を感じる。

be 動詞を「存在する(to exist)」と理解すべき好例は、

To be or not to be: that is the question. (シェクスピア、ハムレット)

→ (直訳) 「存在すべきか、存在すべきでないか、それが問題である存在だ」

→ 「生きていくべきか死ぬべきか、それが問題だ」

I think, therefore I am. (デカルト)

→ (直訳) 「私は考える、それゆえに私は存在する」

→ 「我思う、故に我在り」

Let it be. (ビートルズの歌のタイトル)

→ (直訳) 「それを存在させておけ」

→ 「ほっておく、なるがままにさせておく」

Be your own person.

→ (直訳) 「自分自身として存在せよ」

→ 「独り立ちしろ。」

などがあげられる。

<補足>

上記では、主格補語の例をあげたが、目的格補語の場合にも、補語の前に、**to be**, もしくは **being** を補い、頭の中で、「(目的格補語の状態) 存在する」と考えることが合理的と思う。

He considers himself very important. = He considers himself to be very important.

→ (直訳)「彼は、自分自身を非常に偉い存在であると思っている。」

→ 「彼は、自分を非常に偉いと思っている。」

Keep the door closed. = Keep the door being closed.

→ (直訳)「ドアを閉めた状態で存在するようにしておいてください」

→ 「ドアを閉めておいてください」

2. 進行形「be + ~ing」、受動態「be + ~ed」の be も「存在する」(to exist)と理解する

中学の基礎英語で、進行形は「be + 動詞の現在分詞」、受動態は「be + 動詞の過去分詞」と習う。しかし、いったい何故、be を使うのかという説明を聞いたこともなく、また、その理由を説明した文法書を見たこともない。

英語は、基本的には屈折語の言語である。(日本語は膠着語。)、動詞の原型に s を付加して、三人称・単数・現在を表し、また、一般的に原型に ed をつけて過去時制を表す。ならば、ヘリクツだが、進行形や受動態も、be 動詞を使わずに、主語の人称・数・時制に一对一で呼応する語尾変化をもった動詞の一語で表現すればよいのではないかといいたくなる。しかし、そのような語尾変化をもつ動詞はなく、古英語の時代から進行形、受動態には be 動詞(文法的分類では助動詞)が使われている。(もっとも、進行形は近代英語になって、受身の進行形が現れるなど、より発達したといわれている。)

2.1 進行形

進行形「be + 現在分詞(~ing)」は形であるが、現在分詞(~ing)自体が、主語の活動・動作の継続(反復)を表す意味を持ち、そして、be 動詞は、be 本来の意味である「~の状態が存在する」という意味を与えるもの、と解釈すれば、be 動詞が使われる理由がわかる。

He is reading a book.

は、「彼は(he)、本を読みつつ(reading a book)ある状態で存在する(is)」 → 「彼は本を読んでいる」と解するのが進行形の本質にせまる素直な理解と思う。

<余録>

安藤貞雄は「現代英文法講義」第8章 進行形で、

進行形は古英語からの変遷を見たときに、

(a) 「be + 現在分詞」

(b) 「be on + 動名詞」

の二つの構文の融合によって生じたと紹介している。(b)の古英語の前置詞 **on** は、中期英語では **a** に弱まり、近代英語の標準語ではついに消失し、(a)構文と融合したという。

He is reading a book.

を（単語のつづりは当然異なるが）古英語風に、

He is on reading a book.

とすれば、前置詞 **on** の持つ「動作の継続」を表す意味で進行形のニュアンスが実によく感じられる。

<reading していることの **on (and on)**>（「彼は本を読みつつある状態で存する(is)」）

（なお、同書でも安藤は、進行形は「be + ---ing という迂言形式によって表される」と言い切るのみで、なぜ **be** 動詞が用いられるのかの疑問には答えていない。）

2.1 受動態

受動態は「be + 動詞の過去分詞（～ed）」の形をとるが、進行形の場合と同じく、動詞の過去分詞自体に、受動の意味（・・・ラレル）が含蓄され、**be** はその（受動の）状態で「存在する」という意味を与えるもの、と理解すれば、受動態に **be** 動詞が用いられるのが自然に頷ける。

The book was written by Mr. Smith.

→ 「その本は **Mr. Smith** によって書かれた(**written**)状態で存在した(**was**)」

→ 「その本は **Mr. Smith** によって書かれた」

また、

(a) **I was born on January 1, 1990.**

(b) **He is married with two children.**

は、日本語では受身的な表現はしないが、英語的発想では、**born, married** を過去分詞として受動の意味合いで理解し、**be** はその状態で存在するとすれば、文意は素直に分かる。（もちろん、**born, married** を過去分詞でなく状態を表す形容詞と考えてもよい）

<余録>

なお参考までに、現在完了形は「**have + 過去分詞(～ed)**」の形となり **have** が用いられる。安藤貞雄は「現代英文法講義」で

(a) **I have caught the fish.** （私は魚を捕らえた）

は、古英語では、

(b) **I have the fish caught.** （魚を捕らえられた状態で持っている）

の語順であり、現在のような「**have + 過去分詞 + 目的語**」の語順は14世紀に一般化したと説明している。

完了形は「過去分詞自体が目的語に受身の作用をしている」とし、**have** は「所有(**possess**)する」の

意味を表している」と説明している。

(大修館・英語学辞典(第2章)は、古英語の完了時制は「habban(持つ) + 目的語 + 過去分詞」の構造で、過去分詞は元来は目的格補語の機能を持つ形容詞で、目的語の性・数・格で一致した。しかし、過去分詞の形容詞的性格が薄らいだ結果、後期古英語では、過去分詞が無屈折なものとなり、「habban + 過去分詞 + 目的語」の語順をもつようになった、としている。)

このように考えれば、完了形の文意も抵抗感なく飲み込める。

I have finished my homework. <発想: I have my homework finished.>

→ (直訳)「私は、了えられた宿題を持っている」

→ 「私は宿題をおえた」

3. be 動詞の考察から思う雑感

「お腹がすいた」、「ああ、いい天気だ」を普通の英語では、“I’m hungry.”, “It’s fine” となる。いまさらではあるが、英語は基本的に文頭から主語、動詞を明示する必要があり、日本語にくらべればはるかに強い自己主張する(assertive な)言語という感じがする。日本語では、自明であれば、主語、述語を省いても意味が伝わる場合が多い。(「お茶」、「新聞」、「メシ」、「風呂」、「寝る」の単語が文意として何を意味するかは、よき昔の家庭の主婦ならば理解できた。)

“I’m hungry.”, “It’s fine” ような簡単な英文例でも、ちゃんと主語と be 動詞が座り、主語が「～の状態で存在する」ということを言い表している。この発想は、英語ネイティブの人にとっては当たり前のことでいまさら不思議とも思わないであろう。しかし、体系、構造がまったく異なる言語を母語とする我々日本人が、学習者として英語の本質にせまるには、この英語の「主語」、「動詞」を明示し、強く自己主張するという言語感覚を意識して学習することが肝要と思う。

英語の「be(存在する)」に当たるドイツ語の「sein」、仏語の「etre」、また、英語の「have(所有する)」に相当するドイツ語の「haben」、仏語の「avoir」はいずれも特異な位置づけの動詞であって、人称・数・時制をうけて複雑な変化をする。英語と同根のこれらの言語で、「be」、「have」が特異性をもつ理由には、やはりこれら言語の成立の歴史的・地勢的な背景があるのではないかと思う。英語、フランス語、ドイツ語に限らずほとんどの西欧語は、共通の祖語から分科した言語であることが学問的に分かっている。この共通の祖語は、「インド・ヨーロッパ基語」とよばれ、今から 5000 年ほど前にカスピ海周辺に住んでいた人々が使っていた言葉であった。しかし、人類の常で、人々の社会が作られるとそこに貧富の差が生じ、人間の持つ物欲と権力欲の本性からかならず戦い、戦争が行われた。ユーラシア、ヨーロッパ大陸のような陸続きの地域では、海を隔て地理的に孤立している日本に比べ、はるかに想像する以上の多くの、残虐な戦争があったにちがいない。戦いに負けた方は、皆殺しにあうか(20 世紀になっても、ナチのユダヤ人虐殺、旧ユーゴスラビアでも「民族浄化(ethnic cleansing)」と呼ばれる民族殺戮紛争があった)、もしくは勝者の奴隷となり徹底的に虐待されるのが当然の運命であった。ローマ時代、ローマのコロッセウムでは、戦争に負けた地域の人々が奴隷としてライオンと戦わされその格闘をローマ市民が楽しんだという。

このように、陸続きで、民族、宗教、習慣がことなる多くの人々が接触するところでは、人と人との関係、社会と社会との接点では、常に他者との関係を明示し（即ち、主語、動詞をはっきりさせ）、時に、価値観や利害関係が対立する場合は、自分の優位性や正当性、所有権を強く主張する必要がありそれが自ずと言語の成立（語彙、語順、表現法など）に反映していったのではないか。日本の歴史においても当然、戦（いくさ）はあったが基本的には同じ伝統、価値観を共有する同じ人同士の戦いであって、勝者は敗者を根こそぎに皆殺しにすることや奴隷に使うことはなかった。また、戦のない平時は、人々は平和な共同体を作る農耕民族であった。この日本民族の特徴から、日本語においては、西欧語に比べて、社会の和を乱さない心理が暗黙に働き、自己主張や所有権主張を控えた、いいかえれば（主語を省いた）婉曲表現や情趣的な性格をもつ言語を育ててきたのではないか。

現代は、グローバリゼーションの時代となり、好むと好まざるにかかわらず、経済、政治の仕組みがアングロサクソン流になっている。建前は一応「法の支配による秩序」というが、底流には、虎視眈々と相手の隙、弱みをうかがい、「自己正統性、権利」を強く主張するアングロサクソン流の発想による価値観が共通尺度となっている。

一部ではあるが、まだのどかで温かな里山の情景を残す八千代市に住み、まだ 100%は失ってはいない我々の公共道徳心、自然に対する美意識、人間関係での尊敬、謙譲、思いやり、やさしさなど、これらの日本の美德を守り、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、言い換えれば明治の先人たちがそうであったように「和魂洋才」の気持ちでアングロサクソンの世界/英語に付き合っていきたいと思う。

I.Nishida

(Richmond E.S.)